Shining　ほいく

第４１号　令和４年１２月６日：編集・発行　保育運営課　研修担当

『shining　ほいく』は研修の振り返りと実践への活用を目指し発行する機関紙です。研修受講後に保育の質の向上に向け学んだ内容を実践に繋げていく中で『shining　ほいく』を活用していただけたら幸いです。

～「shining　ほいく」お役立ちポイント～

① 「この間の研修どんな研修だった？」と話すときに『参考になる。』

② 他園で研修をどのように活用しているか知りたい時に『ためになる。』

③ 保育を見直したい時になるほど！と『気づきがある。』

令和４年度、保育運営課研修では『板橋区　乳幼児期の保育・教育ガイドライン』を理解し、実践に繋げ、板橋区全体の保育の質の向上を図るため『板橋区　乳幼児期の保育・教育ガイドライン研修』としてガイドラインの項目ごとに研修を実施しています。

今回の shining ほいくでは下記の研修内容を紹介いたします。

＊「板橋区乳幼児期の保育・教育ガイドライン」講師：学習院大学教授　　秋田　喜代美　氏

＊「ガイドライン研修（ガイドラインの理解）」講師：東京家政大学大学院客員教授　　佐藤　暁子　氏

＊「ガイドライン研修（幼児教育）」講師：白梅学園大学教授　増田修治　氏

＊「ガイドライン研修（乳児保育）」講師：東京大学大学院教授　遠藤　利彦　氏

～区が作成した乳幼児期の保育・教育ガイドライン～

『保育の質のさらなる向上を目指して』　　講師：学習院大学教授　　秋田　喜代美　氏

（赤塚保育園・南前の保育園　園内研修報告：事例を元にグループ討議を含む）

◎板橋区乳幼児期の保育・教育ガイドライン⇒保育の質の向上の手引きとして◎

＊生きる力の基礎（非認知能力）＊…ガイドラインの背景となっている

【乳幼児期は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う極めて重要な時期である】

乳幼児期に多様な経験を積み重ねることにより

＝非認知能力＝

〇豊かな感性

〇好奇心や探究心、思考力

〇忍耐力や自己抑制、社会性や自尊心

『非認知能力』は、その後の学力の獲得や生き方全体に大きく影響する

乳幼児期にこそ培うことが、その後の様々な能力に大きく影響を与えるとされる資質、能力を育み、人格形成や**生きる力**の基礎となる。

☆研修で感じたこと

- 改めて板橋区の将来を担う子供たちの乳幼児期は“生きる力”を培う極めて重要な時期であり、保育士という職務は責任重大であると考えさせられた。
- 他園での実践事例報告から、**ドキュメンテーション**を作ることが保育の質を高めるための方法の一つであると学んだ。【ドキュメンテーション…子どもの活動を視覚的に記録する】
- 他園との情報交換は「保育について語り合う場」となり、様々な取り組みを知ることができて良かった。職員間で語り合う場の大切さを再認識した。

☆保育に活かしたいこと

- 毎月の保育反省や園内研修時にはガイドラインを全職員で見返し保育を振り返ることで、自園の保育や子どもの学びを確認していきたい。
- 自園でもスペースの活用について悩んでいるところがあり、今回の研修の内容をもとに活用を考えられたら良いと思った。
- 保護者への情報発信の仕方など自分の中での課題でもあったので、興味を引くような掲示をし、保育に保護者を巻き込んでいけたら良いなと思う。

『つながる！ひろがる！ふかまる！子どもたちの世界』～遊びの中で、遊びを通して学ぶ保育の実践～
何だろう？　面白そう！　不思議だな！　ワクワク！
講師：東京家政大学大学院　　客員教授　佐藤暁子氏

【小桜保育園公開保育「五感を育てる保育　おもしろがる気持ちを引き出す　あそび」
～ガイドラインの内容に繋がる保育実践の報告～】

五感を育てる保育とは・・・
０歳児は情緒の安定した生活の中で目で見て受動的な五感から始まり、１・２歳児は自ら触るという能動的な経験を継続して行った。幼児期になると友だちと共感しあい、遊びの中で、豊かな経験を通して感じたり考えたり、試したり工夫する自ら考えて行動することにつながっている。【子どもの主体的な活動】

☆研修で感じたこと

- 小桜保育園事例報告では、子どもたちがいきいきと遊びに夢中になっている姿が参考になった。保育士が子どものふとしたつぶやきを逃さず捉え、より深めようと環境を整えていくことの重要性を感じた。
- 時代と共に子どもたちを取り巻く環境や背景は変化していくが、保育園という場で遊びながら楽しさ、面白さ、ワクワクする気持ちを年齢や発達に応じて体験していけるように保育を行っていきたい。
- 日々いろいろな経験ができるようにと考えながら保育をしているが、大人発信ではなくて、子どもたちの姿の中から興味や関心のあるものを見つけて行きたいと思った。

☆保育に活かしたいこと

- 今の子どもの育ちの変化や背景を全体で共有しつつ、必要な行事について再検討したり、主体性を育てていくためにはどんな保育士の働きかけが必要か、園内研修などで話してみたいと思った。
- 五感を使った遊びを意識して、子どもたちが思わずやりたくなるような環境設定や保育の援助をしていきたい。
- 保護者も一緒に巻き込む工夫として、掲示やクラス便りで質問をして、子どもと一緒に探求心・追求心を楽しめるように活用していきたいと感じた。

『乳幼児期におけるアタッチメントと非認知的な心の発達』
～自発的な遊び/学びを支え・促す「安心感の輪」～
講師：東京大学大学院教授　遠藤　利彦　氏

見直されつつある「乳幼児期」の重要性
★生涯発達の基礎工事：高度な学校教育も確かな『土台』の上に積み上げられてこそ益をなす

見直されつつある「非認知」の大切さ
★Well-being（心身と社会的な健康を意味する概念）に至る基礎工事＋「認知」「学力」も『非認知』の支えがあってこそ確実に伸張する
★『非認知』の中核→自己と社会性の心の力…それを育む揺りかごとしてのアタッチメント

恐れや不安を感じた時に特定の他者に『くっつく』ことで安全感や安心感に浸る
物理的に「くっついていること」そのものより「いざとなったら　いつでもくっつける」という感覚の重要性

保育者等は子どもの個性・発達を総合的に受け止め【安全な避難所】基本的信頼が得られるように子どもを育みます
一人一人の探索活動を見守り、感情の表出に寄り添い、困った状況になったとき、助けてもらえるという安心感や信頼感が得られるようにしていきます【安心の基地】

＝安全な避難所としての大人の役割＝
崩れた感情に寄り添い、共感的に受け止め、それを映し出す（感情を言葉に換えて…）
崩れた感情を立て直し、安心感を回復させる

＝安心の基地としての大人の役割＝
安心感を得た子どもを自分のところに留めておくのではなく、その背中を押して、また一人で探索や冒険に向かえるよう応援し、離れたところから見守る

☆研修で感じたこと

- 乳幼児期において非認知能力がどれだけ心の発達を促すのか、また、非認知能力を向上させるためにアタッチメントがどれだけ必要であるのか改めて知り、保育をする中でいかに重要か学んだ。
- これまで“アタッチメント”と聞くと、子どもの気持ちに寄り添い築いていく愛着をイメージしていたが、受け止め安心感を持たせることが全てではなく、子どもにとっての「安心の基地」となり、子どもが一人で立ち直っていけるよう背中を押すことが大切なのだと感じた。
- 子ども一人ひとりの個性にはそれぞれ理由がある、たった一つの理想型はない、それぞれの型を作っていくべきと聞き、更にグループ保育で丁寧に一人ひとりと関わっていきたいと感じた。

☆保育に活かしたいこと

- 子どもにとっての「安心感の輪」であり続けるために、日々の子どもたちへの関わり、言葉かけを意識していきたい。また、保護者にもアタッチメントの大切さを分かりやすく、一人一人の子どもたちに沿った伝え方を考えていきたい。
- 今までは触れ合うことが満たされることにつながると思っていたので、本当の意味での愛着形成、アタッチメントをしていきたいと感じた。
- 保育園は家庭と同じくらい重要な場所であることを心に留めて子どもたちと関わっていきたい。

『板橋区保育ガイドラインを考える』～幼児教育のあり方を考える～

講師：白梅学園大学　子ども学部子ども学科教授　増田修治　氏

＝『主体的・対話的で深い学び』を生み出す３つの視点＝

主体的な学びの視点	対話的な学びの視点	深い学びの視点
周囲の環境に興味に興味や関心をもって積極的に働きかけ、粘り強く取り組み、自らの活動を振り返って、期待を持ちながら、次につなげる『主体的な学び』が実現できているか。	他者やもの、環境との関りを深める中で、自分の思いや考えを表現し、考えを出し合ったり、協力したりして自らの考えを広げ深める『対話的な学び』が実現できているか。	直接的・間接的な体験の中で子どもが心を動かし、子どもなりのペースで試行錯誤を繰り返しながら生活を意味あるものとしてとらえる『深い学び』が実現できているか。

＝幼保小の架け橋プログラム＝

- 架け橋期を通じて、未来を担う子供に学びや生活の基盤を育み、持続可能な社会の創り手となる力の基礎を育む
- 幼保小の教育のつながりを意識した活動が子供の豊かな体験を生み出し、主体的・対話的で深い学びの実現につながる

現代の子どもの状況を考える＝「低学年の荒れ」をどう考えるか？＝

暴力行為が増加している理由…

- 言葉で伝える力が育っていない
- ネガティブな感情を受け止めてもらえた経験が少ない
- 「心のコップ」が溢れて問題行動へ（コップにたまったネガティブな感情の背景にある本当の気持ちに気づくことで対処できていない）等

乳幼児期に出来ること…

- 乳幼児期に非認知能力を意図的に育てる→自制心、勤勉性、外向性、協調性等

～自制心が育っていると、先を見通して考える【ものと時間などのつながりが見えている】ということにつながる～

- 言葉の獲得…年齢ごとの様々な取り組みの中で言葉を獲得し、幼児期には『言い合う』ことができるように！

☆研修で感じたこと

- 子どもが小学校に就学してから自分の力で困難を乗り越えていくためにも、乳幼児期から非認知能力を育てていくことが必要とされていることが分かった。
- 非認知能力や知的好奇心を高めるために具体的にどのような働きかけが必要か年齢ごとの取り組みを見て学ぶことができたので、保育現場でできることを実践していきたい。
- 小学校で荒れている子どもは自分の言葉を言語化できないからと聞き、言語能力を育てていくがいかに大切か分かった。言語力をつけて自己表現ができるように保育士としてどう環境を設定し、工夫していくか、しっかり考えて実践していきたいと思った。

☆保育に活かしたいこと

- 今は他者との関りを深めていく時期だと思うので、保育士の仲立ちのもと自分の思いを伝えたり、相手の思いを知り『対話的な学び』につなげていけたらと思う。
- クラスの子どもの興味関心に合わせた環境作りや保育の仕掛けを工夫しながら保育していきたい。
- 研修の中で紹介していた“あいうえあそびうた”“しりとりカード”“さいころ遊び”“ダンゴ虫の迷路”などクラスでやってみたらどうなるかと想像するだけでもワクワクした。このワクワク感を子どもたちと一緒に楽しみながら広げていきたいと思う。

ガイドライン研修を受講して…【～幼児教育のあり方を考える～】

実践報告　　高島平くるみ保育園　５歳児クラス

～幼児教育のあり方～『子どもの言語能力の育成』についての取り組みの中で、創造性を育成する「ナンテッタ遊び」が紹介されていました。絵や写真を見て場面にふさわしい言葉を考えていきます。

皆が「たいよう組」になってから、色々なことをしたり、色々な場所に行った時の写真を見てもらいます。さてさて、この写真に写っている子ども達は何を言っているでしょうか？

「魚がきれいだな」「魚、大きいね」「こんな魚がいたんだ」
「魚がすごくいっぱいいるよ」「エイがふにゃふにゃだね」
「お魚、かわいいね」

先生！魚が喋ってもいいの？

いいよ！

「こども、こんにちは！」

「葉っぱ、きれいだね」「葉っぱには色んな形があるね」

先生！後ろ向いている子がドングリを持ってると思うんだよね…だから

「ドングリ分けて！」「ドングリ、きれいだね」

帽子の色を替えていて鬼ごっこをしようとしていると思うから

「オニ、誰がいいかな？」「みんな、逃げろ～」

先生！ちょっと待って。皆、半そで着てるからドングリは無いかも！

なるほど！

写真は他にも４枚用意しました。色々と言葉を重ねるうちに『あの時は…』と思い出して盛り上がったり、自由に想像をしながら言葉を当てはめ楽しむことが出来ました。写真との矛盾に気付く子もいましたが、それすらも面白がることが出来ていました。